

も一辺が三・二メートルから五・五メートル程度で、特に大型のものはみられない。遺物の面でも碧玉製管玉が一点出土したほかは、特に顕著な鉄製品などの遺物を出土した住居跡もなかった。集落全体はA地区が所在する尾根の調査区外の南北に更に広がるものと予想される。竪穴住居跡の分布状況からみて、短期間ではあるがかなり大規模な集団が存在したと考えられる。

二 些見遺跡・カワラケ田遺跡

些見遺跡・カワラケ田遺跡はともに、祓川によって開析された洪積台地の中流右岸の段丘上にあり、祓川からの距離は二〇〇メートル程度と近い。遺跡の標高は、三二一〜三六六メートルである。

両遺跡は県道節丸・新田原停車場線を挟んで近接し、ともに遺構の時期および性格が類似していることから、同一の遺跡を構成するものと考えられる。両遺跡の時代は古墳時代後期から奈良時代にかけてが中心であり、同時期の周辺遺跡としては、徳永川ノ上遺跡の古墳群、源左工門屋敷遺跡の竪穴住居跡群がある。両遺跡から源左工門屋敷遺跡までは直線距離で約九〇〇メートルである。なお、両遺跡の所在地は、些見遺跡が大字些見字峰・カワラケ田、カワラケ田遺跡が大字些見字カワラケ田である。

調査経過と 遺跡の概要 調査対象地は水田および畑となっていたが、国道一〇号椎田バイパス予定地となり、昭和六十一年の試掘調査の結果を受けて、昭和六十二年度に福岡県教育委員会が本調査を実施した。

本調査は、些見遺跡が昭和六十二年八月から昭和六十二年十二月までで、調査面積が約九〇〇〇平方メートルであった。カワラケ田遺跡は昭和六十二年十一月から昭和六十三年一月までで、調査面積は約三〇〇〇平方

第4章 古墳時代

ととなっている。検出された遺構は弥生時代から平安時代に及び、皆見遺跡では竪穴住居跡七軒・掘立柱建物跡一三棟・柱列状遺構二基・門状遺構一基・井戸一基・溝状遺構五条などがあり(第33図参照)、カワラケ田遺跡では竪穴住居跡四軒・掘立柱建物跡二棟・土壇墓四基・貯蔵穴七基・溝状遺構八条などがある(第



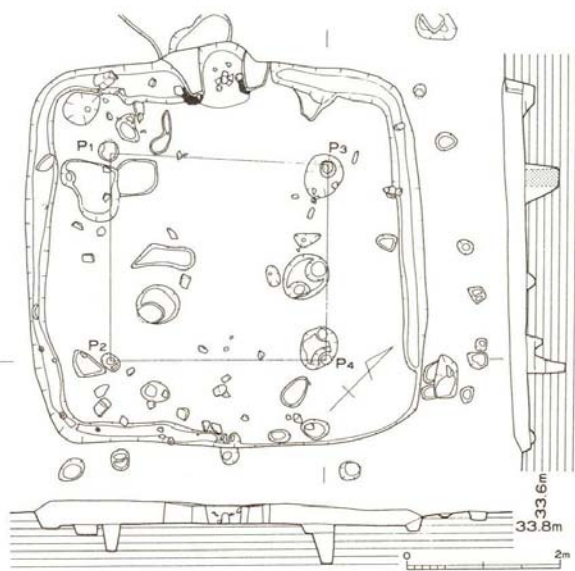
第33図 皆見遺跡・カワラケ田遺跡全体図 (縮尺1/1000)

33図参照)。

遺構の詳細

発掘された古墳時代後期から終末期の遺構は集落関係のもので、一部は奈良時代に及ぶものもある。その構成要素としては、竪穴住居跡・掘立柱建物跡などが主な遺構である。

竪穴住居跡は些見遺跡の北西部に六軒が集中する。その形態は基本的に源左工門屋敷遺跡と同じで、平面形態が正方形に近く、柱穴は方形に四本配置し、壁面下に周溝をめぐらし、壁の一边中央部にはカマドを設ける。ただし周溝とカマドについては、確認されたものとそうでないものがある。規模はやや小型のものが多いが、一辺が三・一メートルから六・六メートルである。3号竪穴住居跡(第34図)は些見遺跡の北西部に位置する。住居跡の平面形は、カマド方向の主軸の長さが五・〇メートル、幅が五・二メートルで、ほぼ正方形である。主柱穴もほぼ正方形に配置され、径〇・三メートル・六メートルの掘方で、柱抜き跡は径〇・二メートル前後である。カマドは北西辺の中央部に設置され、内部に石の支柱が立った状態で検出された。周溝は南東隅の一部が途切れるが、幅〇・一メートル・二メートル



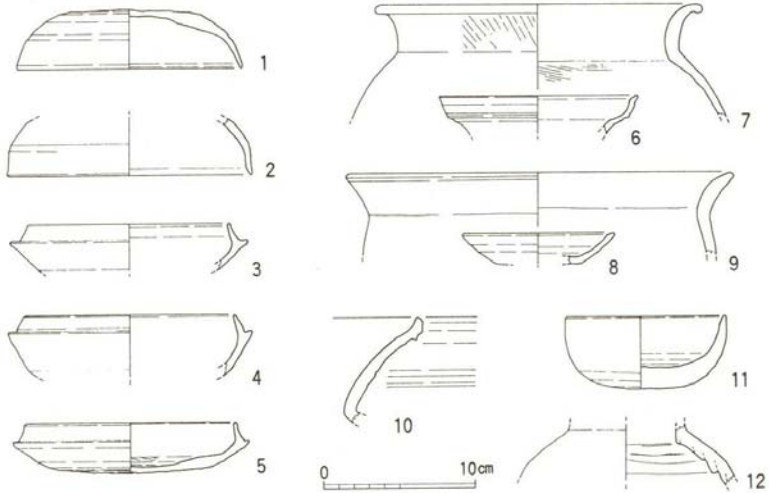
第34図 些見遺跡3号竪穴住居跡実測図(縮尺1/100)

である。遺物(第35図)は須恵器の杯・蓋・壺・甕、土師器の甕、土製模造鏡、土玉、磨石、石鏃などが出土している。時期は六世紀後半から七世紀前半と考えられる。

掘立柱建物跡は皆見遺跡の北部に集中し、建物の構造をみると方二間の総柱建物跡、梁間二間で桁行六間に位置し、一部が調査区外へ延びる。建物跡は桁行六間(長さ二三・六メートル)以上、梁間二間(四・二メートル)の身舎の北東辺に、一間(約一・〇メートル)の廂部が付設されている。柱穴掘方は身舎部では径〇・六〇・七メートルであるが、廂部では径〇・五メートル前後とやや小さくなっている。柱痕跡は径〇・二メートル程度である。主軸の方位は、N-42-Wである。

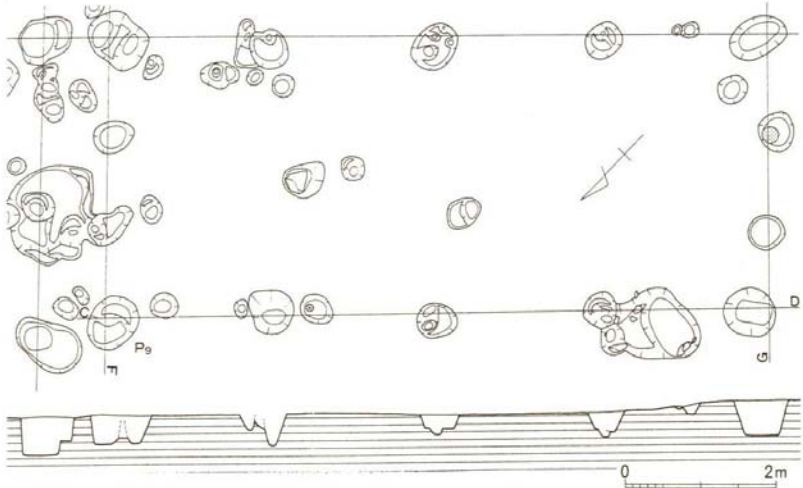
これらの竪穴住居跡・掘立柱建物跡以外に、この時期の集落を構成する重要な遺構として溝状遺構がある。皆見遺跡1・2号溝状遺構は一連の溝状遺構で、調査区の北部東半に位置する。全体としては方形にめぐるものと推定されるが、東部は調査区外で確認されなかった。調査区北部の小谷と平行に走る南北直線部分は長さ五〇〜六〇メートル、幅〇・八メートル、深さ〇・四メートルを計る。また、北側で確認された溝の長さは九メートル、幅〇・五メートル、南側では長さ三〇メートル、幅〇・五メートル、深さ〇・四メートルである。

この溝の内側掘り込み部上面には、二・五〜三・五メートル間隔でピットが検出された。このピット列は柵列状遺構の存在をうかがわせる。更に、この溝状遺構の北部には長さ一・二メートルにわたって溝が中断する部分があり、柵列状遺構と連続した門状遺構の存在が考えられている。この溝状遺構は六世紀後半から七世紀前半の遺構と考えられる。



第35図 皆見遺跡3号竪穴住居跡出土遺物実測図

1・2杯蓋 3～5・8杯身 6甃 7・9・10甃 11埴 12異形土器



第36図 皆見遺跡6号掘立柱建物跡実測図

遺跡の性格

皆見遺跡・カワラケ田遺跡は一連の遺跡であり、最も遺構の数が多き時期は六世紀から八世紀にかけて、つまり古墳時代後期から奈良時代にかけてである。この時期の主な遺構は竪穴住居跡と掘立柱建物跡であるが、時期的には前者が六世紀後半から七世紀前半、後者が一部重複しながら八世紀前半まで継続している。このことは「この集落が従来の農業基盤型の集落から、豊前国府建設と軌を一にした『和名抄』所載の『皆見郷』へと変貌していったことを如実に物語る」と考察される。これは本遺跡の出土遺物の中に、硯や製塩土器があることからもうなずける。大宰府から豊前国府を経て宇佐八幡宮に向かう官道は本遺跡のわずか二〇〇メートル南を北西から南東に走っており、本遺跡から豊前国府政庁までは約一・三キロメートルの距離にある。更に、本遺跡の南東約三〇〇メートルの八ツ重遺跡からは平安時代初期の井戸などが発見されている。このことから、この一帯は本遺跡や源左工門屋敷遺跡の集落や徳永川ノ上遺跡の古墳群が示すように、古墳時代後期（六世紀）以来大規模な集落が展開していたが、八世紀代に入って祓川を挟んだ隣接地に豊前国府が建設されるとともに、倉庫や廂付きの掘立柱建物が建設され、国府関連集落としての性格が付与され、更なる発展を遂げた。その結果として、平安時代に入っても継続して集落が営まれ、『和名抄』に「皆見郷」の名をとどめることとなったのであろう。ただし、本遺跡は皆見郷の前身の一部であり、その最盛期の集落本体はいまだ土中に埋もれたままである。

三 二月谷祭祀遺跡

当遺跡は、今川中流右岸の丘陵斜面に位置するが、この付近は細く険しい小丘陵が南東から北西方向に数